

Obituary of the Late Dr. TOYOKUNI

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Shimizu, Tatemi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00055714

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



rhizomatibus firmis dense caespitosis estoloniferis, foliis latioribus, utriculis maioribus margine-que setulosus differt.

Nom. Jap. Aniai-suge.

Hab. in Japonia-Pref. Akita: Arase-gawa ca. 300m alt. Ani-machi. (R. FUJIWARA, die 31 mense maio anno 1987, Holotypus in KANA 156037)

引用文献

- 秋山茂雄. 1955. 極東亜産スゲ属植物. 257pp. 北海道大学.
 藤原陸夫. 1987. 秋田県産スゲ属の新雑種. 植物地理・分類研究 35: 81-82.
 —. 1991. 秋田県植物目録. 第3版. 165pp. 秋田植生研究会. 秋田.
 —. 松田義徳. 1991. 秋田県森吉山産スゲ属の新雑種. 植物地理・分類研究. 39: 9-11.

北村四郎・村田 源・小山鐵夫. 1964. 原色日本植物図鑑. 草本編III・单子葉類. 464pp. 保育社.

KOYAMA, T. 1962. Classification of the Family Cyperaceae (2). Journ. Fac. Sci. Univ. Tokyo. III. 8(4): 151-278.

OHWI, J. 1936. Cyperaceae Japonicae I. Mem. Coll. Sci. Kyoto Imp. Univ. XI: 229-530.

大井次三郎. 1956. 日本植物誌. 1383pp. 至文堂.

杉本順一. 1973. 日本草本植物総検索誌. II 单子葉編. 630pp. 井上書店.

玉城松栄・秋山茂雄・里見信生・望月陸夫. 1968. 日本産スゲ属植物の分布(1). 金沢大学理学部付属植物園年報 1: 4-13.

吉川純幹. 1957. 日本産スゲ属植物図譜. 第壹巻. 141pp. 北陸の植物の会.

(Received April 13, 1992)

○ 豊国秀夫博士を悼む(里見信生) Nobuo SATOMI: Obituary of the Late Dr. Hideo TOYOKUNI

平成4年(1992)9月26日、豊国秀夫さんが御亡くなりになられたと承り、吾が耳を疑いつつ、新聞を見ると、そこには御逝去を記した冷やかな活字が並んで居りました。御年60才ですから、今後の御活躍を御期待申上げて居りましたし、本誌においても、編集委員として、益々御支援いただかねばならぬ方であるだけに、真に残念至極に存じます。心から御冥福を御祈り致したいと存じます。

私は昭和29年(1954)以来、御交誼いただきましたが、当時、故人は北海道大学理学部に御存学中で、始めて本誌の第3巻第2号に“北海道天塩国暑寒別岳高地植物誌概要”を御投稿下さいました。その後、それが御縁で多数の御論文を御送り下さいました。中でも“北海道の超塩基性岩植物に就いて”は御力作で、9回にわたり連載されました。

今、故人を追憶して、思い出に浮ぶ一つの笑話があります。それは初めてお目にかかった時の事で、稲垣貢一さんと御一緒でしたが、私は稲垣さんは私より年長で、豊国さんは私より年少と承知していたことから、服装からの印象で(稲垣さんは赤いネクタイを締め、全体若づくりであったのに対し、豊国さんは黒っぽい姿で、年とって見えました)、御二人を取違って應待してしまいました。あの世への旅中、この話をお耳にされたら、さぞ苦笑されることでしょう。(〒921 金沢市久安 4-359 Hisayasu 4-359, Kanazawa, Ishikawa 921, Japan)

○ 豊国さんを悼む(清水建美) Tatemi SHIMIZU: Obituary of the Late Dr. TOYOKUNI

当学会の編集委員の一人豊国秀夫さんが、病気のため9月26日に亡くなられた。

私が畏友豊国さんに初めて出会ったのは昭和30年の夏、礼文島だった。その年、私は単身長期の北海道採集旅行中であつたが、以来、親しくお付き合いを頂くことになった。昭和52年の2月には旭川大学から信州大学にお迎えすべく、雪の中を旭川に出向き一晚植物談義に花を咲かせたこと、昭和54年6—8月には海外学術調査でタイ国で3か月をともにしたことなど、けっして忘れることはできない。そして今年の1月、松本市郊外浅間温泉の種生物学会でお会いしたのが最後になってしまった。その折りはとても病気とは見えないほどお元氣であつたし、信州大学の関係者も病気のことは一言も言わなかった。6月に講義に信州大学を訪れたときは、しばらく体調を悪くされていたが、退院され7月には集中的に講義をされるとのことであつた。そんなわけで、お見舞いにもいかずじまいとなつてしまったのが何とも口惜しい。

豊国さんは自他ともに許すラテン語の大家であるばかりでなく、語学の虫であつた。自宅にはロシア文字のタイプライターまでそなえ、羅・露・英・独・仏の読み書きは自由になされていた様子であつた。タイでは自らタイ語をあしらったTシャツを楽しんでおられたのが目に浮ぶ。学会としても、ラテン語の校閲者を失つたのは大きな痛手である。それにしても、まだ10才の愛息を残して行かれたのは何よりも心残りではなかったかと思われる。豊国さんのご冥福をお祈するとともに、御遺族のご健闘を心から念ずる次第である。(〒921 金沢市角間町金沢大学理学部 Faculty of Science, Kanazawa University, Kakuma, Kanazawa, Ishikawa 920-11, Japan)